

## 国際学会 $\mu$ TAS2023 (マイクロタス) 参加報告書

(2023年10月15日～19日 ポーランド カトヴィツェ)

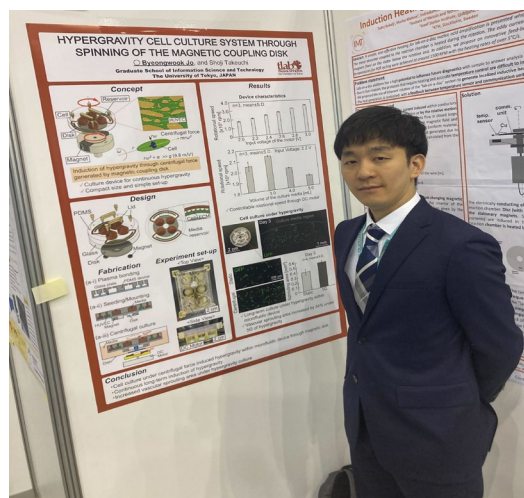
ジョウ ビョン ウク  
趙 炳 郁

東京大学大学院情報理工学系研究科助教

2022年度奨学生

2023年10月15～19日にポーランドで開催された国際学会  $\mu$ TAS2023 (マイクロタス) に参加した。

$\mu$ TAS 学会は今年が27回目の開催でマイクロ流体力学、分析化学、バイオエンジニアリングや機械及び電気工学など様々な研究背景を持った研究者たちが発表を行う学会である。1年ごとにヨーロッパ、アメリカ大陸、アジアの順で開催されており、今回はポーランドの首都 Warsaw (ワルシャワ) から電車でおよそ3時間離れた Katowice (カトヴィツェ) で開かれた。参加者はおよそ900人で、その中では日本人研究者が176人と最も多かった。以下、アメリカ、韓国、中国の順。大陸ごとの比率はヨーロッパ40%、アジア40%そしてアメリカ大陸が20%であり、ヨーロッパ開催であったため少しアメリカからの参加比率が低い傾向にあった。参加者の内、500人がポスター発表、100人が口頭発表で、私の所属する研究室からは10件(ポスター8件、口頭2件)の発表があり、単一研究室としては最も人数が多かった。今年は例年より細胞培養に関する内容が多く発表され、特に薬物に対する細胞や組織の反応、組織構築方法などの研究が多かった。自分の研究分野も組織工学やその構築方法に関する内容だったため他国の研究者たちと意見を交換でき、非常に有益な時間だった。



(写真1) ポスターの前で



(写真2) 所属研究室メンバーとの集合写真

4年前に研究室でポスドクとして在籍していた研究者の Marco Costantini 先生 (写真3 一番左) がポーランドの Polish Academy of Science で独立した研究室を持つことになられて (PI: 研究代表者)、今回の学会で久しぶりにお会いできたことか

ら向こうの博士課程の学生や先生たちを紹介してもらった。翌日に Marco 先生の学生の口頭発表があるにも関わらず、夜中 3 時まで研究室メンバー全員が飲み会に参加する文化は日本で生活した僕にとっては少し新鮮な驚きだった。



(写真 3) Marco グループとの写真

今まで国際学会には何回も参加したが、韓国の研究者たちと交流したことは今回が初めてだった。日本とは研究の雰囲気異なるらしく、科研費や JST みたいな国の予算で運営される研究課題の分担者として学生(修士、博士課程)が参加できることだった。学生には給料が支給されて、その給料で学生は学費と生活費を賄うシステムで、学生の負担は日本の学生よりは多いが、給料や経験の観点から見ると韓国の方が研究以外の素質を育てるには良いと思った。また、著名なジャーナルに投稿した場合、著者には給料以外にインセンティブが支給されるらしく、研究者達のモチベーションには良いシステムだと思った。現在所属している専攻は IT 系の人が多く、インダストリーに比べてアカデミアの給料が総額でも時給で考えても低いため、アカデミア志望の人が少ない。もう少し研究者へのインセンティブがあれば良いのではないかと思った。

学生達との交流で、日本の理系は平均的に 3 年で卒業することを話したら他国(韓国、中国、アメリカ)の学生はかなりショックを受けていた。普段、生物に関わる専攻は学位期間が 6~7 年程度であり(工学系はより短い)、日本より 2 倍ぐらい長いいため、多くの学生が研究の興味を失い、インダストリーへ就職する流れがあることが分かった。(そのため、むしろアメリカでポスドクを行う人はアメリカ以外の国から学位をもらってくる人が多い)

学会があったため、ポーランドを見て回るほどの時間はなかったが、世界遺産第 1 号で有名な Wieliczka (ヴィエリチカ) 塩鉱山のツアーには参加できた。2 時間程度のツアーだったが鉱山の 1% しか見られないほど大規模なところで、鉱山内部のすべてが塩であるため参加者はしょっちゅう壁の塩を味わったりしていた。

ポーランドまでは 2 回の乗り換えと 24 時間以上の移動時間のため非常に体力を必要とした学会参加ではあったが、渥美財団の海外学会派遣プログラムのおかげで多くの研究者たちと交流ができ非常に有益な時間であった。この場を借りて財団の方々に感謝を申し上げます。